

3-2

災害対応力を育てる

いのちを繋ぐ術を知る

(2) 福祉的配慮のある避難所づくり

岩間 伸之・野村 恭代

「配慮」とはなにか？

生活のしづらさのある人への「配慮」とは、いったいどのようなことなのでしょう。災害時に必要となる福祉的な支援としては、一般の避難所のなかに支援を必要とする人のための場所を設けることや、一般の避難所とは別に福祉避難所を設置することなどが考えられます。それでは、なぜ支援を要する人のための「場」を設ける必要があるのでしょうか。

避難所生活を想像してみてください。食事、お手洗い、音、プライバシー、不安など、少し考えてみただけでも多くの課題があります。たとえば、車いすを利用されている方は、車いす用のお手洗いが必要になりますが、避難所にそのようなお手洗いはあるでしょうか。あかちゃんのいるお母さんは、あかちゃんに母乳をあげることもあるでしょう。避難所のなかの多くの人から見える場所で母乳をあげることはできるでしょうか。精神的に辛い状況にある人は、周囲の人の話し声や物音が気になるかもしれません。このように、ほんの少しの配慮を必要としている人はたくさんいるのです。

避難所での配慮

ここで、避難所での配慮の一例を紹介したいと思います。「ダンボールベッド」という言葉を聞いたことは

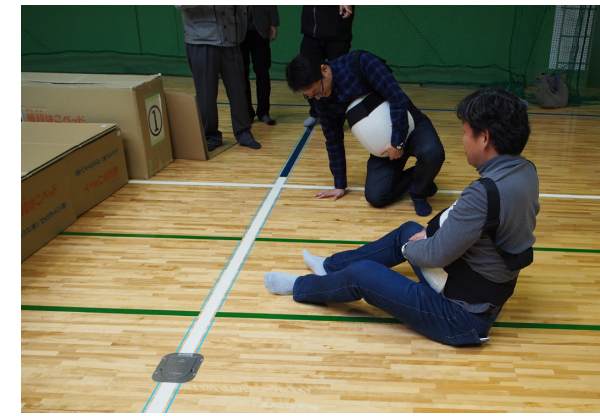
ありますか？高齢で足腰の弱い方や妊婦等は、床に座る・立つという行為が難しい場合もあります。そのような場合、少しの高さがあるだけで、立つ・座ることや横になる動作が楽になる場合があります。下記の写真は、市民の方を対象に福祉的配慮のある避難所づくりを行った際の写真です。



次の写真は、妊婦体験やアイマスクをしてもらいながら、床に座ったり寝たりしたときとダンボールベッドに座ったり寝たりした時との違いを体験している様子です。妊婦体験をされた方は「妊婦さんてこんなに体が重いんだね。一度床に座ったら、立ち上がれないわ」

「寝るのだけでも一苦労」などと、妊婦のしんどさを口々に述べていました。次に、ダンボールベッドに寝てもらったときには、「少しの段差があるだけでずいぶん立ち上がりやすくなる」と感想を述べていました。

ダンボールの使い方としては、ベッドとしてだけでなく、ダンボールの一部を目隠しやつい立として利用するグループもありました。このように、ダンボールベッドのようなものが一つあるだけでも、配慮を必要とする人にとっては肉体的・精神的な負担が大きく軽減されることあるのです。



ここで、「配慮=別の場所に隔離すること」ではないことは強調しておきたいと思います。「何らかの配慮を要する人を、一般の避難所とは別の場所に集めればよい」ということでは決してありません。東日本大震災のとき、津波発生時は、すべての人が逃げるべきこと最優先事項でした。障害の有無にかかわらず、あらゆる人が声をかけあって、手を取り合って、避難しました。その後、避難所に移り、はじめのうちは障害の有無にかかわらず、食物を分け合いながら、励まし合いながらともに過ごしていました。ところが、避難所での生活が長引き、そこで過ごす時間が長くなるにつれて、なんらかのこだわりのある人や突然大声を出す人、独り言を言う人等に対して、他の避難者から苦情が出るようになったのです。

避難時や避難所での生活が始まったばかりの頃は、あらゆる人が支え合いながら生活していたのですが、時間が経つにつれ、生活のしづらさのある人を別の場所に移してほしい、との要望がちらほらと出始めたのです。その結果、生活のしづらさのある障害者や高齢者は、特に別の場所を希望していない人までも、一般の避難所とは別の場所に移動するといったことも見られました。

平時からの「つながり」の重要性

平時の生活においても、あらゆる人が地域のなかで生活する権利を持っています。また、あらゆる人が同じ地域住民としてつながることが、地域の防災力を高めるうえで必要なことです。

高齢者は元気なまま高齢者になる人ばかりではありません。何らかの生活上の支援を必要とする人もたくさんいます。すべての人が年を取り、いつかは高齢者になります。近い将来、家族だけで生活のしづらさのある人を支援することには限界がやってきます。地域

住民がつながりながら、地域のなかで支えあうという
ことは、防災においてのみならず、平時の地域社会に
も求められることなのです。

また、普段から福祉的配慮について考えておくこと
も大切なことです。たとえば、妊産婦の方には、着替え
や授乳などの際、プライバシーを確保することのでき
る場所を用意することや、電車のなかで席を譲ること
などが配慮にあたるでしょう。認知症の高齢者の方
には、声かけや挨拶、ちょっとした変化を見逃さないな
ども必要な配慮になります。

避難所生活では、子どもへの配慮も忘れてはなり
ません。昼夜逆転などに陥らないよう、生活リズムを整
えること、安全に遊べる場所や空間、時間を確保した
り、できるだけ話しかけ、スキンシップを図ることで子
どもたちに安心感を与えることも必要な配慮なのです。
そして、これらは災害時にのみ必要なことなのではな
く、普段から必要な配慮でもあります。災害に対応す
る力を発揮できるかどうかは、平時の取り組み次第と
いっても過言ではありません。

これからは、いつ、どこで、どのような災害が起こる
かわかりません。言い換えると、いつ、どこで災害が発
生してもおかしくないのです。いつ、自分たちの身の
回りに災害が起こっても、冷静かつ適切な対応、そし
て人と人とのつながりを保ちながら支え合うことができ
るよう、普段から備えておくことが重要なのです。